

第2回 えびな・いちご文学賞 大賞作品

詩部門 大賞作品

たまご石の川原

武田 真樹

芝生の丘を
ふわり 風のように下り
石の階段を
そりり 横向きに下り

草の屏風の
向こうへ向こうへと進んでいくと
ススキはほとんど高くなり
人影は消えていくから
大人だつて
何かを脱ぎ捨てながら
子供に帰っていく

水溜りには
小さな魚が住んでいて
流れに帰る目を待っていた

石の広場を
ガシヤガシヤ崩して歩く度に
新しい模様が顔を出し
手に収まる形は みんなたまご
ごま塩 縞模様 あばた顔
出身地の違う同士が
同じ顔で寄せ集まっているのは
なんだか可笑しい
なぜだろう

「あつ こっちの方がいい」
一番のお気に入りを探して
ちいちゃんは わらしべ長者の最中
「結局は
無難ものに落ち着くのよね」
そんな私も ちいちゃんの左手を
気にしながらついていく

川のほとりに辿り着けば
雲の布団が
落ちかかつてきそうなくらい
平べったい世界で
流れの先と 遠い空とがくっついて
絵本の中に
たたみ込まれてしまいうさだ
アキラくんが
アンダースローの体勢に入る
「ちょっと待った」
そつちは 鮎釣りおじさんの竿の先
笑い声が溶けていき
雨降り山はずつと見ていた
青いエプロンを広げた
お母さんのように

たまご石の川原から

もとの世界へ戻るとき

ちいちゃんは

一番のお気に入り置いていった

ここに光るんだつて

気づいたから

でこぼこに慣れた足には

もとの芝生は大人しすぎて

丘まで登ると

ススキも 川原も 小さく見える

お土産はたつたひとつ

革靴に残った いとおしいすり傷

夕焼けはきつと

いちごワインの色だから

ね 見て帰ろ

詩部門 選評

清水 哲男 (詩人)

第一回より応募数は少なかったものの、逆に全体的なレベルは高くなったという印象でした。ただ依然として、むりやりにテーマと結び付けようとした作品が散見されたのが惜しまれます。もっと自然体で。

大賞の武田さん。まずは、それこそ無理なく自然に伸び伸びと書かれているのを感じました。「たまご石の川原」は、別世界、非日常的空間です。それがこんなに身近にあることの発見と歓び。何でもありませんが、これぞ「詩」という作品だと思いました。(以下 略)

小説部門

大賞作品

『母ちゃん』を捜して

うすい ゆきこ

妹が家出した。
妹といつても私より三つ下の、いい大人だ。
家出といつても行ったところは分かっていない。
書置きには「海老名でしばらく暮らします」と書いてあった。
夫を十五年前に亡くした、しかし今ではすっかり人生を楽しんでいる母は、「海老名って神奈川県よね？また辺鄙なところを選んだものね」と苦笑した。
私たちが家族が健在な頃、海老名の隣の市で暮らしていたのだ。当時の海老名は駅の回りはがらんとしていてまさに「田舎」の印象だった。
父が亡くなってほどなくして、女三人は母に由縁のある横浜市に引越したのだ。
私はイライラしていた。妹はいつも勝手気ままに人生を渡っている。フイッと出ていったり、ノコッと帰ってきたり。外国に行っていた時期もあるらしい。まったくいい気なものだ。
私はこの妹とは幼い時から気が合わなかった。妹は女の子が好む「おまご」とや「人形遊び」また年頃になっても「おしやれ」「タレント」などにもまったく興味を持たない子だった。
妹が小学校に上がる時のことだ。「赤いランドセルは嫌だ」と言い出した。しかもその理由は「怖い」というのだ。結局譲らない妹は、女子の中でただ一人「黒いランドセル」で六年間を過ごした。
小さい頃はよく変なことを言っていた。「今ココボックルがいたよ」とか、妹だけ残して外出先から戻ると「ビエロに網渡りをしろって言われた」と、泣きじゃくっていたこともあった。私は突拍子のないことを言って両親の気を惹く妹にうんざりしていた。
中学生の時、仲良しの友達に「あんなの妹って変人よね」と言われ、そこにいた全員が一斉に笑った。私もその場では笑っていたが、一人で帰る道すがら恥ずかしくて悔しくて、歯を食いしばって涙をこらえた。
聞いた話だが、妹は授業中にクラスの女の子に突然駆け寄り「大丈夫？早く病院行ったほうがいいよ。先生、救急車呼んでください」と言ったそう。その子は面食らい「なに？大丈夫だよ。なんなのよ？」と怒っていたらしい。ところがその子が次の日に盲腸の手術をすることになったらしく、妹はますます興味をわけていった。
当の妹は誰にどう思われようともまったく意に介さず、自分流のスタイルを貫き通す子だった。
母親は時おりそんな娘のため息をもらす様子はあったが、父親のほうはこの子は面白い子だ」と、むしろ誇らしく思っているふうもあった。
思春期になると私は回りの友達にいろいろ、父と母を「パパ」「ママ」から「お父さん」「お母さん」と呼ぶようになった。「お父さん」「お母さん」は「パパ」「ママ」よりも少しだけ遠い存在になった気がした。妹はそういうことに鈍感なのかずっと「パパ」「ママ」を通していた。私はそんな強い意思と個性を持った妹に嫌悪と嫉妬の気持ちを抱いていたのかもしれない。
妹の家出。ぜんぜん構わない。どうもいとおもっている。ただ、今回は事情が違った。妹はうちの「母ちゃん」という大切な猫を連れて行ってしまったのだ。
「母ちゃんとはノラ猫だった。小汚いみすばらしいキジ猫だった。横浜に越してまもなく、ある冬の雨の夜に、妹が抱えて帰って来てしまった。その時は母も私も閉口したが、結局母ちゃんはうちの大事な大黒柱になっていったのである。
「あの子がいなくなるのはいつものことだよ！せつない許せない！母ちゃんだつて大迷惑よ！」私は怒りで声を震わせた。
母はそんな私の剣幕に動じることもなく、
「大丈夫じゃない？もともと母ちゃんはあの子が拾ってきたんだし。どんな生活するんだか知らないけど、母ちゃんの面倒はちゃんと見るでしょ」
私はため息をついた。「だめだ、だめだ。お母さんも全然分かってない。」「犬は人につき、猫は家につく」ものなのよ」それにこの十五年間、母ちゃんのお世話も妹でもなく母でもなく、この私がやってきたのではないか。
私は母ちゃんを奪われ、悶々としていた。
そもそもなぜ猫に「母ちゃん」と名付けたかという、ずぶ濡れの子猫に何を与えていいのか母も私も妹も見当がつかなくなったのだ。誰も猫と暮らしたことはなく、触れ合うほど興味もなかった。冷蔵庫の中は母が好きなビールで占領されていた。
「鯉節とかないの？」「チーズは？」
結局鯉節は切れていて、チーズは高級なものしかなかった。そしてちょうど家にあつたもの。それは「海老名の母」だった。「海老名の母」は海老名在住の母の友人が贈ってくれたものだった。
「猫に母あげちゃうなんて罰当りかしら！贈ってくれた彼女に失礼よね」言い訳とも弁解ともとれないことを口走りながら、母は一粒チビ猫の口に母を近づけた。するとチビ猫は一生懸命海老名の母と足がもつれた。
父の名前が書かれた個室に入ると、そこには色んな機械やらチューブやらがつけられた父が横たわっていた。近くにいたのが手が届かない距離感があった。妹は父のかたわらにいた。母は父の手をにぎり、無言で涙を流していた。私はショックで病室の隅に透明人間のようにただ佇んでいた。頭の中がグルグルと渦巻き

